

財団法人松江市教育文化振興事業団
埋蔵文化財課年報Ⅳ

平成10年～11年度



財団法人 松江市教育文化振興事業団

表紙写真：縄文時代前期の漆液容器（大手遺跡）

序

松江市は「国際文化観光都市」として文化の涵養に力を注いでおります。

当市には古代出雲文化の中心として国府や国分寺などの遺跡が存在しますが、更にその時代を遡る縄文・弥生・古墳の各時代でも注目すべき遺跡が見つかっております。

財団法人松江市教育文化振興事業団の埋蔵文化財課は平成5年に市内の埋蔵文化財の発掘調査を行い、以て市民の文化・教育の向上に寄与することを目的として成立しました。以来、釜代1号墳、袋尻遺跡群などの発掘調査で成果を上げております。

平成10年～11年度にかけては4カ所の発掘調査を実施しましたが、縄文時代前期初頭の漆液の付着した鉢の検出や、3重の壕に囲まれた田和山遺跡など全国的に問題を提起する調査を実施することになりました。

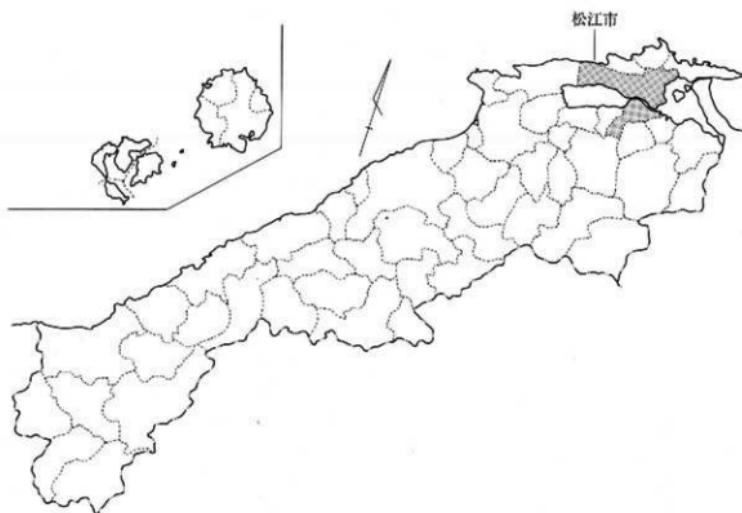
今回、平成10年～11年度の埋蔵文化財課年報を発刊する運びとなりました。本年報が、ひろく皆様の埋蔵文化財への理解を深めていただくための一助となり、より一層郷土の歴史に対する知識を豊かにしていただくことを願ってやみません。

最後になりましたが、本財団の発掘調査にご指導、ご協力いただきました関係機関、関係者、市民の方々に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご支援、ご協力をいただきますようよろしくお願い申し上げます。

財団法人 松江市教育文化振興事業団

目 次

序文	
目次	1
第1章 財團法人 松江市教育文化振興事業団の沿革と組織	2
第2章 平成10～11年度の発掘調査	4
田和山遺跡群	6
夫手遺跡	10
久米遺跡群	14
門田遺跡	18
第3章 平成11年度以前の調査状況	20



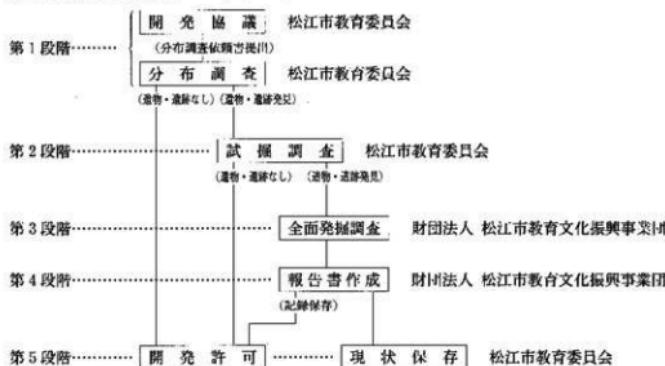
鳥取県地図

第1章

財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

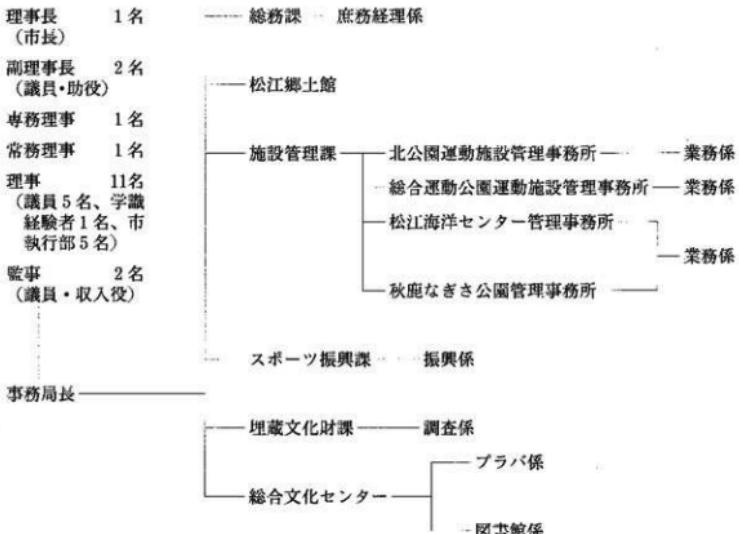
- ◇ 設立 昭和51年（1976年）4月1日
- ◇ 所在地 島根県松江市学園南一丁目21番1号（平成10年11月住居表示変更）
- ◇ 目的 事業団は松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。
- ◇ 事業 目的を達成するため次の事業を行う。
 - (1) 松江市及び松江市教育委員会から委託を受けた教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。
 - (2) 教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。
 - (3) その他、事業団の目的を達成するため必要な事業。
- ◇ 埋蔵文化財課
 - ◇ 設立 平成5年7月1日
 - ◇ 所在地 松江市母衣町180-21番地
 - ◇ TEL 0852-28-2065
 - ◇ FAX 0852-28-2038
 - ◇ 業務
 - 1) 埋蔵文化財の発掘調査に関すること。
 - 2) 埋蔵文化財課の庶務経理（予算及び決算を含む。）に関すること。

◆ 松江市埋蔵文化財業務フローチャート



◆ 組織

(平成12年4月現在)



◆ 平成10年度職員体制(平成11年3月31日現在)

理事長	宮岡 寿雄
専務理事	北村 悅男
事務局長	柳浦 孝行
課長	事務局長兼務
調査係長(調査員)	瀬古 諒子
主任	後藤 哲男
主任	曾田 健
主任主事(調査員)	江川 幸子
主任主事(調査員)	古藤 博昭
主事(調査員)	石川 崇
主事(調査員)	曾田 長雄
主事(調査員)	落合 昭久
嘱託職員(調査補助員)	松下 剛
	廣瀬 貴子
	藤原 堅
	庄江 光洋
	青山 悅朗
臨時職員	高麗 優子

◆ 平成11年度職員体制(平成12年3月31日現在)

理事長	宮岡 寿雄
専務理事	北村 悅男
常務理事	福井 勝美(平成11年3月31日現在)
事務局長	柳浦 孝行
課長	事務局長兼務
調査係長(調査員)	瀬古 諒子
主任	後藤 哲男
主任	曾田 健
主任主事(調査員)	江川 幸子
主任主事(調査員)	古藤 博昭
主事(調査員)	石川 崇
主事(調査員)	曾田 長雄
主事(調査員)	落合 昭久
嘱託職員(調査補助員)	松下 剛
	廣瀬 貴子
	庄江 光洋
	青山 悅朗
臨時職員	高麗 優子

第2章 平成10~11年度の発掘調査

平成10年度の本財団の発掘調査受託事業は田和山遺跡群と大手遺跡の2件である。併せて大佐遺跡群及び、逕倉横穴墓・米坂古墳他の報告書作成事業を行った。

現地調査のうち、田和山遺跡群は市立病院移転予定に関連した調査であり、平成9年度からの継続事業である。平成10年度は第1環壕を中心に調査を行った。調査によると、第1環壕は弥生時代前期後半に掘削が開始し、中期後半に環濠が廃絶されるまで数度の埋直しが確認される。環濠の底からは3000を越えるつぶて石が検出できた。同遺跡は平成11年度も継続して調査が行われる。

夫手遺跡の調査は手角地区ふるさと農道建設に伴い実施されたもので、縄文時代から古墳時代にわたる遺物が多量に検出された。中でも漆液の付着した小型の鉢や、長さ43cmを測る木製の櫂などはC14年代測定方法による自然科学的な調査によって、約6000年前に遡ることが明らかになった。これは国内的にみても最古級に位置付けられるもので注目すべき結果である。

平成11年度は田和山遺跡群の継続調査の他に、久米遺跡群と門田遺跡の3件の現地調査を行った。久米遺跡群、門田遺跡は夫手遺跡とともに調査終了後（同11年度）に報告書作成事業に移った。

田和山遺跡群の平成11年度の調査は環濠周辺のF～L区の各地区を中心に行い、弥生時代から中世にわたる住居群を検出した。住居と加工段の総数は29を数える。弥生時代の住居が環濠外での検出であることとは、遺跡の性格を考える上で重要な要素である。調査は平成12年度も継続して行われる。

久米遺跡群は（仮称）比津が丘団地造成工事に伴い調査されたもので、平成11年度は久米B遺跡の調査を行った。6世紀代の堅穴式住居1棟、8～9世紀代を中心とする古代の孤立柱建物11棟を検出した。松江市北部では数少ない古代の集落跡の調査としてその成果は高く評価される。

門田遺跡は「3.3.74松江本次線都市計画街路事業」に関連して調査されたもので、弥生時代中～後期の溝、杭列等を検出した。これらは水路に関係するものと考えられる。黒曜石の原石や剥片も検出され、周辺には集落や水田が予想される。今後、周辺での調査が期待される結果となった。

平成10年～11年度発掘調査一覧

	遺跡名	遺跡の種類	調査原因	調査地	調査担当
1	田和山遺跡群	集落・古墳他	土地造成	乃白町	落合
2	大手遺跡	集落？他	農道整備	手角町	江川・曾田
3	久米B遺跡	集落	土地造成	比津町	石川
4	門田遺跡	集落？	都市整備	乃木福富町	古藤

平成10年度～11年度報告書作成事業一覧

	遺跡名	遺跡の種類	調査年	担当	刊行年月日
1	大佐遺跡	古墳・城跡	平成9年	石川・古藤・江川	平成11年3月
2	逎倉横穴墓・米坂古墳他	古墳他	平成2、4～10年	江川・昌子・瀬古	平成11年3月
3	大手遺跡	集落？他	平成10年	江川・曾田	平成12年3月
4	久米遺跡群	集落	平成2、3、11年	石川・中尾	平成12年3月
5	門田遺跡	集落？	平成11年	古藤	平成12年3月



発掘調査位置図 (1/8000)

田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する弥生前中期～中期の環濠遺跡を主とした遺跡群である。

近隣の遺跡としては、本丘陵地内南方に前方後円墳の田和山1号墳、本丘陵の北東に派生する丘陵に弥生中期頃の土塁墓が多数みつかった友田遺跡、本丘陵北西の現松江農林高校付近に弥生土器が出土している欠田遺跡及び門田遺跡の存在が知られている。

本概要是平成10・11年度の調査で確認された環濠遺跡の弥生前中期頃の環濠と、全掘された第2・3環濠と、環濠遺跡周辺の住居跡等の調査成果を以下のとおり記すものである。なお、環濠遺跡の中心となる独立丘陵頂部一帯（山頂部）や環濠遺跡全域のおおまかな概要是、平成9年度の年報に記しているのでここでは省略する。

1. 環濠遺跡

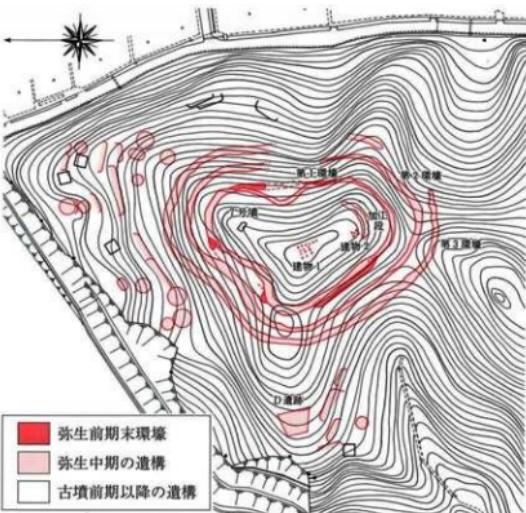
今回の調査では、山頂部をほぼ一周する弥生中期の第2・3環濠（第1環濠と同時期）と、本丘陵に環濠を造り始めた最初の段階である弥生前中期頃の環濠を確認することができた。

弥生中期の第2・3環濠は北西側～東側と南西側において調査をおこない、これら部分について環濠の存在が確認された。なお、東側の一部においては地滑りの為、環濠が消滅していると考えられたので調査は断念した。

環濠の断面形は第2・3環濠共に深いV字を呈し、環濠外側から内部（山頂部）への進入は極めて

困難な印象を強く受けるような
造りであった。

環濠内からの遺物は、第1環濠と同様に弥生中期の壺・甕が大半を占め、石器類は黒曜石製及びサヌカイト製の石鎌が出土している。また、角のとれた比較的丸い形状の砾石も出土している。これは第1環濠出土の砾石と同様で、本丘陵で存在している石とは異質のものであり、当時の川原等で採取し持ってきたものと思われる。個数は第1環濠ほどは無く、第1環濠～第2環濠～第3環濠とその出土数は減少しているようである。



田和山遺跡群遺跡位置図（平成11年度現在）

弥生前期末頃の環壕は、山頂部の西、北西、東側の3箇所で確認されている。いずれも弥生中期の第1環壕のやや斜面下方側から本丘陵の尾根筋部分を掘り残す形で検出しておる、丘陵を一周する弥生中期の環壕とは造成形を逸しているものであった。環壕の断面形は緩やかな曲線状を呈し、底部は広く深さの浅いものである。

環壕内からの遺物は、弥生前期末～中期初頭の壺・甕と蛤刃石斧、黒曜石製及びサヌカイト製の石鎌、磨製石剣の切先片等と礫石が出土している。なお、この礫石は弥生中期の環壕から出土している丸い形状のものとは異なり、角ばった石が大半を占めている。この角ばった石はこの丘陵の地山の一部で露出している石材と同様のもので、弥生中期の頃との礫石の採集方法の相違が見られるものである。

まとめ

弥生前期末頃の環壕は1本で尾根筋部分を掘り残し、弥生中期の環壕は3本で丘陵を一周廻らしている。このような各時期における環壕造成の変化は、軍事的緊張度の差異によるものと思われる。すなわち弥生中期の段階が最大の緊張期である。

調査者は弥生中期の段階でこの地で実際に戦いがあったものと考えているが、3本の環壕によって強固に守られた、2棟の建物跡しか確認されていない山頂部の何を守ろうとして、何を奪取するために戦いがおこったのか。今後の十分な検討が必要であろう。



田和山遺跡群 全景（航空写真）

（平成11年度現在）

2. 周辺住居跡

今回の調査では、環壕遺跡の環壕外側斜面の南西側から東側にかけて、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、加工段（掘立柱建物跡？）、柱穴群、貼石造構、落し穴状造構を確認した。ここでは、弥生時代の造構と古墳時代以降の造構とにわけ、以下のとおり概要を記すものとする。

弥生時代の造構

弥生時代の造構は竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡4軒、加工段9所、小柱穴群2所を検出することができた。いずれも弥生中期のものである。

竪穴住居跡は北西側から北東側にかけて加工段と入り交ざるかたちで検出した。この竪穴住居のはほとんどは弥生時代の典型的な形状である円形を呈しているが、北側で検出した1軒で方形状のものが確認されている。このような形状を呈す弥生時代の竪穴住居跡は鳥取県の青木遺跡などでも確認されているが、この時代では稀なものである。

このほかに北側の周辺造構最高所にあたる場所から、焼失した竪穴住居跡を1軒確認している。この焼失住居跡は、上部堆積土を除去すると住居内のほぼ全面の土が焼けている状態で、同レベル及び焼土下側からは炭化した木材を検出しており土屋根だった可能性が考えられる。また、住居跡の内外からは黒曜石の原石やチップを検出しており、この住居や周辺において黒曜石を加工して石器などを作っていたものと思われる。

掘立柱建物跡及び加工段（掘立柱建物跡？）は、南西側の一部と竪穴住居跡と同じ北西側から北東側にかけての範囲で検出している。このうち南西側の掘立柱建物跡の1軒はやや大型のもので、床面からは台形土器が出土している。

加工段は、ほとんどが多数の柱穴を伴っているものであり、ここに掘立柱建物等が建っていたとすれば数回の建て替えがあったものと思われる。

弥生時代の造構からの遺物は、弥生中期の壺、甕、高杯、土玉及び、磨製石剣、石包丁、石鎌（黒曜石、サヌカイト）、黒曜石の原石が出土している。



焼失した竪穴式住居跡（弥生中期）

古墳時代以降の遺構

古墳時代以降の遺構は古墳中期の竪穴住居跡3軒、平安～中世の掘立柱建物跡3軒を検出することができた。

古墳中期の竪穴住居跡は北側で検出しており、いずれも方形を呈すものである。遺物は土師器の壺、高杯、須恵器の蓋、砥石が出土している。

平安～中世の掘立柱建物跡は東側で検出しており、遺物は土師器片、須恵器片が出土している。

この他の遺構として、貼石状の遺構と落とし穴状遺構が確認されたが、いずれも遺物は出土せず、遺構の時期等は不明である。ただ、貼石状の遺構については弥生中期の加工段の上に造られており、これより新しい時期の遺構である。

まとめ

以上のとおり今回おこなった環濠外側斜面の調査では多数の住居跡が確認でき、貴重な資料が得られたと思われる。

なかでも、弥生の住居遺構は中期に限定され、この田和山丘陵に環濠が造られ始める弥生前期末頃の住居遺構が皆無であったことは、この遺跡の性格及び存在価値が時代ごとに変貌していることを現すものではないだろうか。これは前述の環濠遺跡でも述べたとおり、この遺跡の弥生中期における軍事的緊張期をも示しているのかもしれない。

今回の調査では、この田和山遺跡の全貌を知る上で非常に重要な手がかりが得られたものと考えているが、今後より一層の遺跡解明に向け、周辺の遺跡はもちろんのこと、もっと広い地域の遺跡をも視野に入れ検討する必要があるものと考える。

(落合 昭久)



南西側の弥生時代掘立柱建物跡

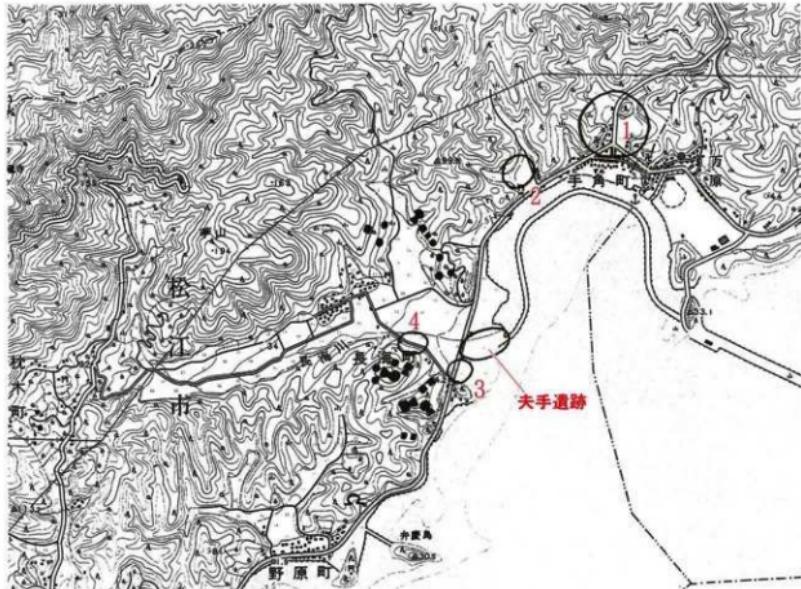
夫手遺跡

夫手遺跡発掘調査は、島根県松江農林振興センターによる「手角地区ふるさと農道整備事業」にともない、平成10年4月10日から同年12月11日まで2700m²について開発に伴う緊急発掘調査を実施したものである。

夫手遺跡は、島根県松江市手角町469-5外に所在する。

長海川河口に位置しており、主として長海川の氾濫にともない上流から大量の遺物が運ばれて埋没した低湿地の遺跡である。部分的には縄文時代前期の自然地形を検出した。

調査区西端付近の最下層では、縄文時代前期の泥土層を確認し、泥土の状況から、そこは水の流れがほとんど無い沼地状の地形であったことがわかった。その泥土の中に打ち込まれた状態で、約30本の杭を検出したが、その性格については不明である。泥土中からは他に4本の櫂が出土しており、そこは長海川もしくは中海に通じる船着き場に利用されていた場所であったことが推察された。櫂は全てスギ材で作られたもので、炭素14年代測定ではいずれも現在より概ね6000年前のものであるとの結果を得た。これらの櫂はすべて柄が折れているため全長は不明であるが、水掻き部分が幅、長さとも



夫手遺跡位置図 (1 寺の脇遺跡 2 横田作遺跡 3 柳瀬遺跡 4 杉戸遺跡)

に小さい点を特徴とし、ほぼ同時期の縄文土器と較べても小さく、ましてや日本海の外洋に漕ぎ出すにはあまりにも心許ない印象を受けるものであった。

また、調査区ほぼ中央付近では幅が狭く浅い小川を確認し、その砂層中から小型の繩文土器1点が単独で出土した。この繩文土器は西川津式の小型の鉢で、内面には漆が厚い層をなして付着しており、外面にも多少の付着が認められ、漆液容器として利用されていたことが判明した。この漆を分析したところ、クロメ漆の状態であることがわかり、接着剤としてではなく、すでに塗り物の材料として利用されていた可能性が高くなかった。さらに、漆の中に少量の赤色顔料が混入していたことから、同時に別の容器で赤色漆が作られていたことも推測された。この漆の一片で炭素14年代測定を実施したところ、現在よりも6800年前のものであるとの結果を得た。この年代は全国的な視野から見ても、時期判定がおこなわれた漆としては最古級の範疇にはいる資料である。夫手遺跡において繩文時代前期からすでに高度な漆工技術、漆文化が存在していたことが明確となり、また西川津式土器に実年代を当てはめることができたことにおいて、実に貴重な発見であったと考える。

最下層である繩文時代前期層の上には、薄い無遺物層を挟んで大量の遺物を含む青灰色砂礫層の堆積が見られた。この層に含まれた遺物は長海川上流に立地する遺跡に付随する遺物が土石流によって



夫手遺跡発掘調査風景

いきに流されてきたものであり、上流に存在する遺跡の時期や性格を反映しているものと思われる。したがって、これらの遺物を観察することによって長海平野に存在する遺跡の一端をかいま見ることができるであろう。

青灰色砂礫層に含まれていた大量の遺物は、時期的には縄文時代早期から古墳時代中期までの幅広い時期のものが認められた。しかし、出土点数の割合を見ると縄文時代から弥生時代にかけての遺物はきわめて少量で、大部分は古墳時代前期後半から中期にかけての比較的残存状況が良い遺物で占められていた。種別では大量の土器の他に木製品が多数含まれており、機織り具や火鑽臼、農具未製品、建材など生活に直結した道具が多く見られた。このことから、長海川流域では縄文時代から細々とではあるが継続的な生活が営まれており、古墳時代前期末から中期にかけて大規模な集落が存在していた様子がうかがえる。

そこで改めて長海川上流の周知の遺跡分布状況を眺めてみると、長海平野の特に中海側に近い低丘陵上には中規模クラスの古墳を含む多くの古墳群、渕切古墳群、藤田古墳群、藤山南古墳群、堀越古墳群が立地している。渕切り古墳群を例にとると、全長33.1mの前方後円墳1基、全長20.5mの前方後方墳1基、直径20mの円墳1基のほか陪塚とも考えられる小規模古墳も多数築かれている。これらの古墳群は調査されていないため時期は不明だが、後期という積極的理由が無いことから、前期から中期にかけて築かれた古墳と考えて良いのではないかという説がある。出雲地方における中規模クラスの古墳の数および分布地は非常に限られており、中海沿岸の島根半島側での分布は現時点では長海川流域しか知られていない。中海を見おろすように複数の中規模クラスの古墳が密集して築かれている点から、長海平野に本拠地を置いた豪族は、狭い長海平野だけではなく、広く中海沿岸一帯をも支配した一大勢力であったと思われる。

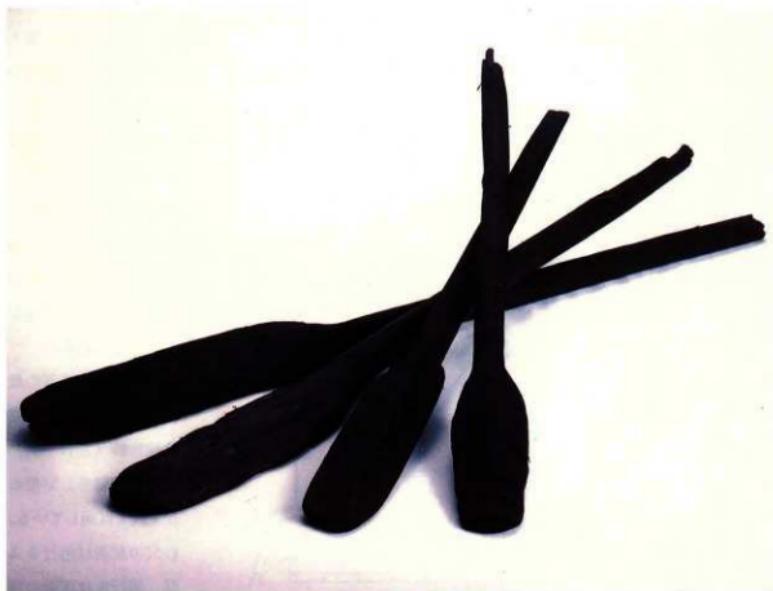
では、これらの古墳群を築いた人々の生活の場所はどこにあったのであろうか。渕切古墳群が立地する丘陵の北東側裾部の緩傾斜地で採砂工事中に杉戸遺跡が発見されている。この遺跡は調査されずに工事が進められており、現在はほぼ消滅状態にあるため詳細は不明であるが、わずかに古墳時代中期の土器や炭化米の採集が伝えられている。もし、大古墳群を築いた人々の集落跡がこの杉戸遺跡周辺に存在していたと仮定すると、現在推定されている杉戸遺跡の範囲だけではとてもおさまりきれないのであろうから、遺跡はもっと長海平野の低地部分にも広範囲に広がっていた可能性が高いと思われる。そうであったとすると、低い場所に営まれていた集落の一部が、長海川の氾濫に巻き込まれて下流の夫手遺跡まで遺構ごと押し流されたとは考えられないであろう。

ちなみに、古墳時代後期以降になると長海平野の遺跡数は激減し、南西の本庄町に遺跡分布の集中が見られるようになる。古墳時代中期に多くの遺物を残した豪族は、後期に継続することなく、忽然と長海平野から消え去っている。

(江川 幸子)



縄文時代の漆液容器 内面に残る漆（永鶴正春氏撮影）



縄文時代の櫛

久米遺跡群

久米遺跡群は法吉町から比津町にまたがる丘陵地帯に位置し、各遺跡は谷を挟んで両側に存在する。本遺跡群は斜面中腹を加工して住居址をつくる小集落である。(第1図)

(1) 久米遺跡

本遺跡群内の最北端、東側に伸びる低丘陵の南向き斜面に位置し、地形は東側に口を開いたようなすり鉢状地形である。平成2年に松江市教育委員会が調査をおこない、計13棟の掘立柱建物跡を確認した。南向き斜面を上下2段に分けて住居をつくっているが(上段:6棟、下段:7棟)、住居址から遺物が出土していないため、時期差があるのかまた同時期に存在したのかは不明である。また斜面のため、盛土部分が流されやすく、住居址の規模が正確にわかるものはなかった。



第1図 久米遺跡群位置図

遺物は遺構に伴って出土したのではなく、その大半が上層の遺物包含層である灰褐色土層から出土している。出土遺物は須恵器の高坏・坏身・坏蓋・壺蓋類、土師器の甕・瓶・カマドなどの生活用品が多数出土している。本遺跡の時期は、遺構の床面から出土していないため時期の限定は困難だが、およそ奈良時代～平安時代初めにかけての集落ではないかと思われる。

第2図は下段部の最西端から検出した掘立柱建物跡(SB-04)で、北西隅をL字型の加工段で区画している。柱穴の配置は桁行き3間、梁行きは床面の流失や他の住居址の重複

のため1間しか確認できなかった。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径25cm前後の柱が使用されていたと推測される。残念ながらこの住居址から遺物は出土しなかった。

(2) 久米A遺跡

本遺跡群の西側、久米遺跡から谷を挟んで東側に位置する。地形は南側に伸びる低丘陵で、緩斜面で南向き斜面である。平成3年に松江市教育委員会が調査をおこない、掘立柱建物跡を2棟確認した。

久米遺跡と異なり、盛

土部分の流失などはあまり見られないが、調査前は畑として使用されていたため、造構上面上は削平されており、検出された柱穴などは浅い。

出土遺物は須恵器や上師器の破片が出土したが、造構床面からではなく、形状や規模がわかるものは少なかった。遺物から本遺跡の時期はおそらく8世紀中頃～9世紀頃と思われる。

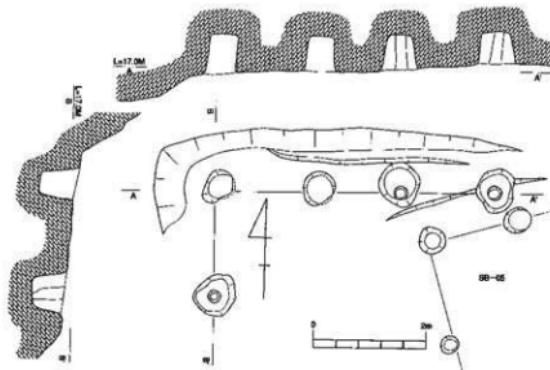
第3図は検出した掘立柱建物跡(SB-02)である。柱穴の配置は桁行き2間、梁行きは3間確認できた。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径15～25cm前後の柱が使用されていたと推測される。残念ながらこの住居址から遺物は出土しなかった。

(3) 久米B遺跡

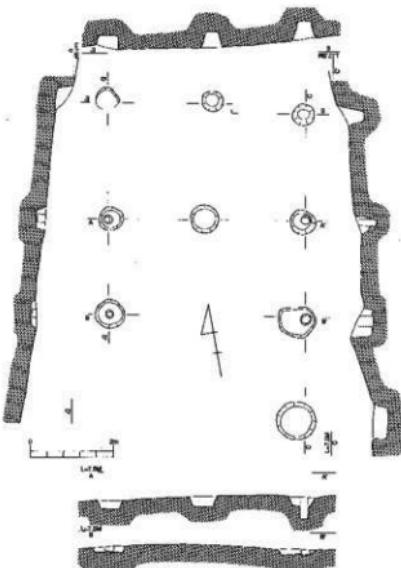
本遺跡群の南側、久米遺跡と同じ丘陵で、谷を一つ挟んで南側に位置し、地形は東側に口を開いたすり鉢状地形である。

掘立柱建物跡は東向き斜面に9棟、南向き斜面からは2棟検出されている。

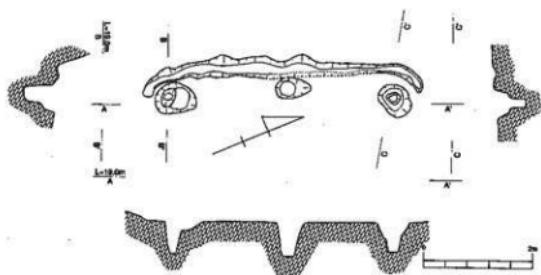
竪穴住居は谷部平坦面から検出した。住居址の覆土層や付近のトレンチから須恵器は环身・环蓋・高环・壺・横瓶などが、土師器は



第2図 SB-04(久米遺跡)平面図



第3図 SB-02(久米A遺跡)平面図



第4図 SB-01(久米B遺跡) 平面図

甕・瓶・カマドなどの生活用品がそれぞれ大量に出土した。斜面の住居址からの出土遺物に比べて時期的に古く、単独でこれだけ使用したとは考えにくく、上部に掘立柱建物跡以外の遺構が存在し、そこから落ちたものか、故意に廃棄したものではないだろうか。

それ以外の遺構は炭焼き用の焼成土壙を含めた土壙が6穴、加工段状遺構2基を検出した。

遺物は弥生時代後期初め頃の壺形土器から16世紀代の肥前系陶器碗と思われる遺物が1点ずつ出土しているが、大半は古墳時代後期と奈良時代～平安時代初めの2グループに分けられる。

本遺跡は出土した遺物から谷部平坦面を中心に古墳時代後期には何らかの遺構が存在していたが、奈良時代～平安時代初めにかけての集落が斜面を中心になっていたことがうかがえる。

第4図は東向き斜面の上段部最南端で検出した掘立柱建物跡（S B-01）で、北側を溝で開むように区画している。柱穴の配置は桁行き3間、梁行きは床面の流失などで不明である。また柱痕跡らしき痕跡も確認され、それによると直径25cm前後の柱が使用されていたと推測される。この住居址からは擬宝珠形のつまみのついた須恵器の壺蓋や底部に回転糸切痕のある壺身などが出土した。これらの遺物から奈良時代～平安時代初めの住居址と考えられる。

(4) まとめ

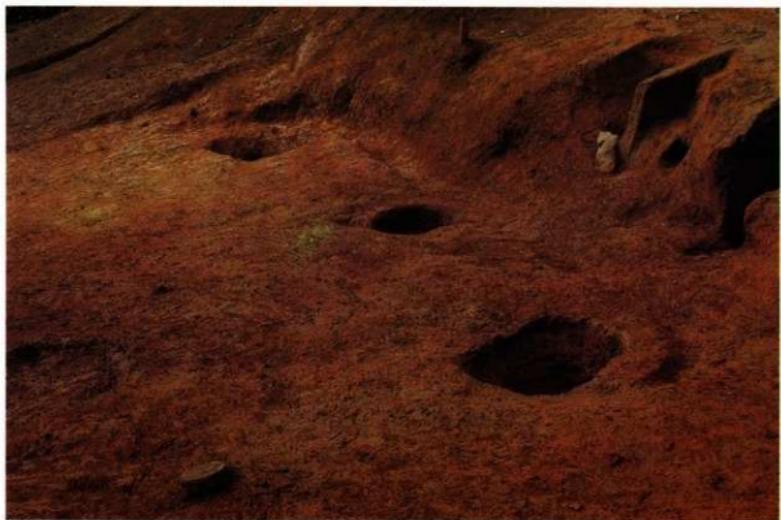
本遺跡群は特徴として以下のことが上げられる。

- ①掘立柱建物は斜面を加工して造る。
 - ②斜面を削った際の土砂を盛土して平坦面を拡張している。そのため盛土した部分が弱く、流失してしまった可能性が高い。
 - ③出土遺物は古墳時代後期ものと奈良時代～平安時代初めにかけてのもの多い。
 - ④土師器のカフドや瓶など生活用具と想われるものが多く出土している。

本遺跡群は谷を囲むように三方に丘陵があり、各遺跡はその谷に向かって集落が形成されている。恐らく生活空間は斜面であり、生産基盤である田畠は谷部に作っていたのではないだろうか。しかしながら谷部に関しては調査が行われなかったため、断言はできないが谷部を含めた丘陵全体が大集落だった可能性が高い。集落を考える上で生活空間だけではなく、生活を支える生産基盤を含めた空間を考える必要性がある。その意味からも本遺跡群はその可能性を秘めている。

いずれにしても現在まで松江市の橋北地域では奈良時代～平安時代初めにかけての大規模な集落は調査されておらず、今後の周辺の調査によってより明確な様相がわかるだろう。

(石川 崇)



久米B遺跡 SB-01



久米B遺跡 南向斜面

門田遺跡

門田遺跡は松江市乃木福富町地内に所在する。

門田遺跡発掘調査は、松江土木建築事務所の計画する道路建設事業に伴い平成11年6月10日から平成11年12月9日にかけて実施したものである。調査区の面積は1,500m²、現況は田圃及び畠地である。

本遺跡は松江市南部に広がる丘陵地から北に伸びる尾根の突端と、宍道湖に向かって北流する忌部川に挟まれた河岸段丘上に位置している。

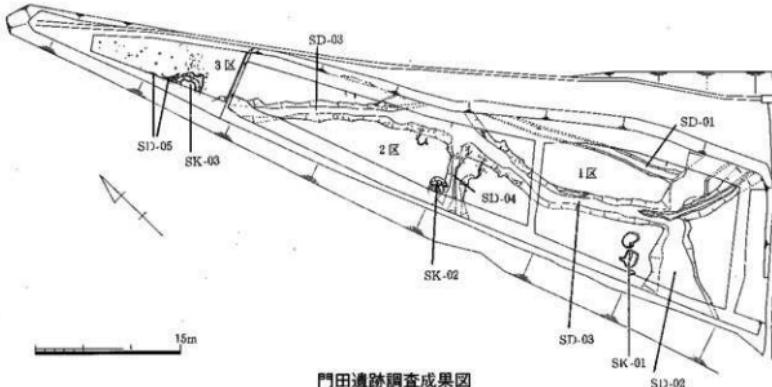
調査対象範囲を三区に分けて調査を行なった結果、自然流路跡を2条、溝状遺構を3条、土壙を3基、柱穴を17個、そして溝状遺構に伴って杭列跡を検出した。

調査区南側の1区で検出された自然流路跡SD-02は西方からの水流の跡と考えられる。埋土からは弥生中期から後期初頭の土器の他、石製品や土玉が出土した。

SD-01は1区東側で検出された水路跡と思われる溝状遺構である。遺構の幅は約1m、深さは約0.5mである。埋土中から出土した遺物は、時期的に弥生中期中葉の壺甌類に限られる。

溝状遺構SD-03は水路跡と思われ、今回の調査で確認された最も規模の大きな遺構である。確認された長さは約50m、幅は2~3メートルであり、断面形はU字形である。この遺構に沿う形で木杭跡が検出され、水路の護岸を目的として打ち込まれたものと考えられる。遺構上から出土した遺物は、弥生中期中葉から後期中葉にかけてのものであり、遺構に伴う出土遺物の中では最も新しいものが出土している。遺物の種類としては壺甌類、高杯の他、多数の石製品や用途不明の木製品が出土した。

3区として調査を行なった調査区北側では住居跡は確認できなかったが、柱穴跡と思われるビット群が検出された。この遺構上層から黒曜石片が多数検出されたことから、石器製作場としての簡易的な建物が存在していた可能性が考えられる。



本遺跡からは土器片、石製品などに混じり分銅形土製品が2点出土した。この遺物は祭祀関連の遺物として理解されているもので、松江市内では他に布田遺跡で10点、西川津遺跡で6点、タテチョウ遺跡で2点の出土例が報告されている。(1)

今回の調査では、水田用の水路と考えられる溝状構造とそれに伴って、数多くの土器や大型石包丁などの石製品が出土した。住居跡こそ確認されなかったものの、これらの遺物は、稻作を中心とした当時の人々の生活を物語るものである。

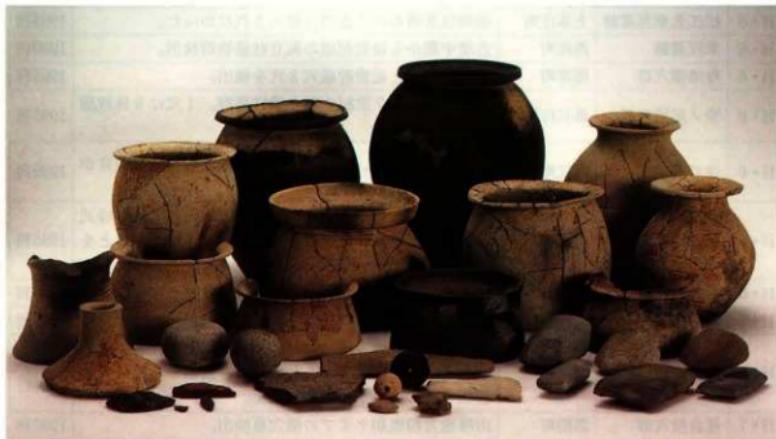
(古藤 博昭)

(1) 勝部智明、松本岩雄、守岡正司「山陰地方分銅形土製品集成」『古代文化研究』第8号 鳥根県古代文化センター
2000年3月



分銅形土製品

土玉



門田遺跡出土遺物

第3章 平成11年度以前の調査状況

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H・5	釜代1号墳ほか	西浜佐陀町	前期古墳。主体部2基確認。第2主体部は粘土椁を伴う長大な割竹型木棺で、水銀朱・鏡・玉類出土。第1主体部は現状保存。	1994刊
II・5	背沢谷横穴群	乃代町	6世紀後半から7世紀後半の横穴墓群。	1994刊
H・5	向遺跡	国屋町	奈良～平安期の掘立柱建物跡検出。	
H・5	論田4号墳	西津田町	(課設立以前の調査の報告書作成事業)後期の古墳。S60年に調査された論田横穴墓群の調査成果も掲載。	1994刊
H・5	柴尾遺跡	上東川津町	主体部を3基持つ前期古墳と黒曜石を中心とする石器生産遺跡検出。	1994刊
II・5	角森遺跡	八幡町	弥生後期の土器数点出土	1994刊
H・5	敷居谷遺跡	東牛馬町	5世紀の方墳のほか2基の円墳検出。後世の祭祀関連の遺物出土。	1994刊
H・5	出雲國分寺跡	竹矢町	完形で良質な瓦ばかりの瓦窓まり検出。	1995刊
H・5	深田遺跡	大庭町	奈良～平安期の道路状遺構検出。	
H・5	岩夕峠遺跡ほか	大井町	一字一石経塚検出。	
H・5	出雲國府跡	大草町	直接国府に関連する遺構は検出されなかった。	
H・5	勝負谷遺跡	大庭町	さいの神と積み石の塚、古代と考えられる道路状遺構を検出。	
H・5	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。	1999刊
II・6	柴尾遺跡	上東川津町	縄文土器を伴う石器生産遺跡検出。前期古墳主体部(割竹型木棺)から翡翠製曲玉・鉄鏃出土。	
H・6	敷居谷古墳群	東牛馬町	古墳中末期の方墳1基。後期初頭の方墳主体部から太刀、刀子各1出土。	1995刊
H・6	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。	1999刊
H・6	米坂遺跡	西尾町	古墳中期から後期初頭の掘立柱建物群検出。	1999刊
H・6	舟津横穴群	薙津町	横穴墓2穴と近世貯蔵穴3穴を検出。	1995刊
H・6	筆ノ尾横穴群	東長江町	6世紀後半～7世紀中頃の横穴墓群。1穴に6体埋葬の横穴墓あり。	1995刊
H・6	寺の前遺跡	山代町	自然流路中から、鳥尾、円面鏡、輸入陶磁器の破片が出土。	1999刊
H・6	黒田畔遺跡	大庭町	奈良時代の土坑内から墨書き土器・製塩土器・律令様式の土器が出土し、役所関連の遺跡が近辺にあることを示す。中世末期の土坑墓6基検出。	1995刊
H・6	二名留遺跡	乃木福富町	若干の遺物が出土したが、遺構は検出できなかった。	1995刊
H・6	向山1号墳	大庭町	トレンチ調査で未密掘の石棺式石室発見。	1995刊
H・7	向山古墳群	大庭町	32×20m以上の方墳。墳裾から子持壺出土。石棺式石室内の副葬品は搔き出されており、前庭から馬具・武器類・玉・須恵器の細片が出土。	1996刊 (概報)
H・7	逆倉横穴群	朝酌町	山陰地方初現期タイプの横穴墓検出。	1999刊
H・7	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物数片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。	1999刊

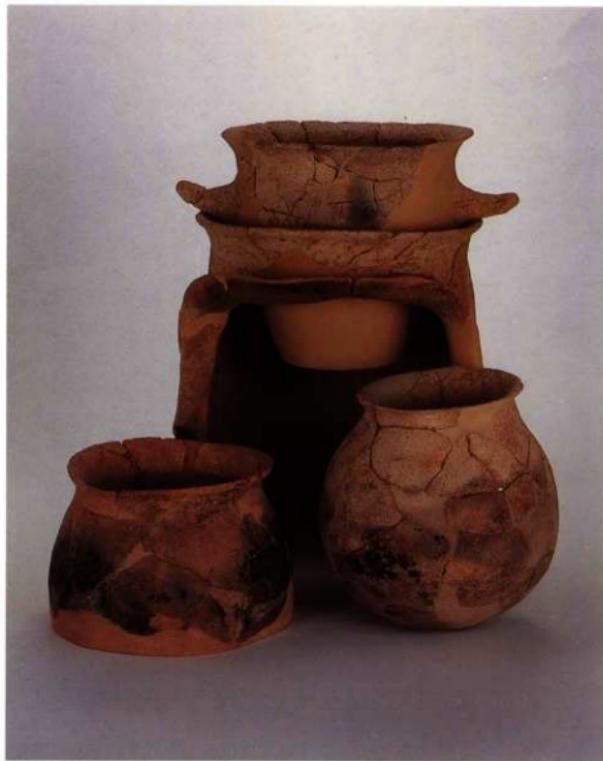
H・7	宮尾古墳群他	西川津町 上東川津町	室町後期～安土桃山時代の五輪塔2基の他、土坑群を検出。	1996刊
H・7	袋尻遺跡群	乃白町	竪穴住居7棟、土坑5基、後期古墳2基、近世墓2基を検出。	1996刊
H・7	四王寺跡	山代町	調査範囲が狭く、四王寺との関連性を判断することはできなかった。	1996刊
H・7	大久保遺跡	乃白町	焼上坑、ピットを検出。遺物は数点出土したのみ。	1996刊
H・7	川原後谷横穴群	川原町	墓道の一部のみ検出。	1996刊
H・7	寺山小田遺跡	矢田町	古墳中～後期の建物跡検出。2棟の建物内から玉類出土。	1996刊
II・8	小無田Ⅱ遺跡	山代町	山代郷南新造院(四王寺)の瓦を焼いた瓦窯跡3基を検出。2基は現状保存。	1997刊
II・8	米坂古墳群	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳7基と墳丘を持たない埋葬施設8基を検出。	1999刊
H・8	柴三遺跡	西川津町	弥生時代終末期の玉造工房跡を含む竪穴式住居跡を3棟、掘立柱建物跡を12棟、柱穴列3条、等を検出。	1997刊
II・8	袋尻遺跡群	平成町	17ヵ所の調査で古墳6基、竪穴式住居1棟、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、土坑3基、横穴墓3穴、古墓群を検出。	1998刊
II・8	松江北東部遺跡	上本庄町	竪穴式住居、掘立柱建物、祭祀遺構等を検出。遺物も手持勾玉の他、大量の土器片が出土。	1999刊
II・9	大佐遺跡群	西持田町	弥生～古墳の墳丘墓、又は古墳が8基、上器棺2基、及び戦国時代の真山城塞群の一部も検出。	1999刊
H・9	米坂古墳群・ 柴尾遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳群。	1999刊
H・9	松江北東部遺跡	上本庄町	縄文時代の有舌先頭器のほか、中世の掘立柱建物、井戸を検出。	1999刊
H・9	田和山遺跡群	乃白町	弥生時代前期～中期の3重の環壕を検出。山頂からは柵列と掘立柱建物を検出。石斧・石鎚の他に銅劍を模した石劍も出土。	2001予
II・10	夫手遺跡	手角町	縄文～古墳時代。長海川河口に洪水等による包含層が形成。漆液の付着した小型の鉢、木製の櫛などは約6000年前のもので、全国でも最古級に属する。	2000刊
H・11	久米遺跡群	比津町	6世紀～8世紀の集落。竪穴式住居1棟、掘立柱建物11棟検出。生活用具である壺、瓶、竈などが多数出土。	2000刊
H・11	門田遺跡	乃木福富町	弥生時代中期の自然流露、溝、土壙、柱穴、杭列などを検出。付近の田和山遺跡との関連で注目される。	2000刊

埋蔵文化財課年報Ⅳ

2000年10月

発行 財團法人
松江市教育文化振興事業団

印刷 松栄印刷有限公司
松江市西川津町667-1



久米B遺跡出土土器